

カザフスタン村落部における 恋愛結婚の諸相

藤本 透子

●ある若い女性の結婚

カザフスタンの村に長期滞在していた時、娘の嫁入り道具と姻戚への贈り物を準備しているところだと、親しくなった四〇代の女性が話してくれた。客間に置く食器棚と食器類、鮮やかなパッチワークが施された長座布団、美しい絨毯、温かな厚手の寝具など、すべて嫁入り道具用にそろえているという。高価なスーツ、金のイヤリングや指輪、手ごろな価格のヘアピンやスカーフなども数多く用意しており、これらは嫁ぎ先への贈り物だという。しかし、主役であるはずの娘、アイグル（仮名）はすでに家にいなかった。実は、夫となる人の家で暮らし始めていたからである。

街に暮らしていたアイグルが嫁入りしたという急ぎの知らせは、ある日突然村の両親のもとに

届いた。カザフ語で「アルップ・カシユ」つまり「娘を」取って逃げる」と呼ばれる結婚の仕方であった。アイグルが大学在学中に出会ったつきあってきた男性が、彼女を自分の村に連れて行って両親に引き合わせ、その日のうちに嫁入りさせたのである。この知らせを受けてアイグルの両親は驚いたが、二二、二三歳でそろそろ年頃だと考えていたこともあり結婚を認めた。数カ月後、アイグルは婿たちとともに実家を訪れて歓迎された。アイグルの両親にとって

は、これが婿とその両親に初めて会う機会であった。さらに一カ月半後、アイグルの嫁ぎ先で婚姻儀礼と祝宴が行われた。嫁入り道具と姻戚への贈り物を用意していたのは、その準備のためであった。

●二つの結婚の仕方

アイグルのような結婚の仕方はやや略式であり、正式にはカザフ語で「コルナン・アルウ」、つまり「娘をその両親の」手から受け取る」と呼ばれる結婚の仕方がよいとされる。その場合、若者の両親がまず娘の両親を訪ねてあいさつし、娘にイヤリングを贈るこゝとが婚約の印となる。その後、娘の両親が娘を送り出す祝いを行って若者とその両親に娘を託し、役場での婚姻登録とモスクでの婚姻儀礼を経て、若者の両親がベタシヤルと呼ばれるカザフの婚姻儀礼と祝宴を行う。しかし、娘の両親から許可を得て婚約を経て結

婚するという正式な手順がふまれることは、特に村落部出身者の間ではそれほど多くない。むしろ「娘を」取って逃げる」ことのほうが一般的である。なぜなのだろうか。

少し歴史をさかのぼると、二〇世紀初頭までのカザフ社会では、結婚は夫が属する父系出自集団と妻が属する父系出自集団との間重要な紐帯であった。このため、結婚相手は親が決めることが一般的で、揺りかごに眠る赤ん坊の頃に婚約させることもあった。男性は結婚に際してカルンマルと呼ばれる家畜、つまり婚資を女性の両親に渡す必要があり、そうして初めて女性を両親の「手から受け取って」結婚することができた。娘の両親の許可を得ずに「娘を」



ベタシヤルと呼ばれるカザフの婚姻儀礼

取って逃げる」結婚は当時からあったが、婚資を払えない男性による実力行使であったり、両親が結婚を許さない男女による駆け落ちの手段であった。ところが、社会主義時代に婚資の支払いや親が決める結婚が家父長制の残滓として批判されると、「取って逃げる」結婚が恋愛結婚のひとつのかたちとして一般化していったのである。

●女性の意思―「誘拐婚」あるいは「駆け落ち」？

カザフ語の「(娘を)取って逃げる」結婚は、英語では「ブライド・キッドナップング(花嫁の誘拐)」と訳され、ややエキゾチックに語られることも多いが、実際のところ女性ほどの程度まで同意しているのだろうか。アイゲルは、その日に嫁入りさせる予定だと恋人から聞いていたと後から語ってくれた。「両親が驚くだろうということだけが心配で胸が痛かった」という。ただし、恋人にある日突然に兄弟や両親の家に連れて行かれたり、友達が休暇で家に帰省する際に一緒に遊びに行きその友達の兄に嫁入りすることになるなど、村の他の女性たちに聞くと

自分の嫁入りについて前もって知らなかった場合も多かった。

女性の意思を充分には考慮していかないようにもみえる結婚の仕方に応じる理由として、彼女たちが挙げるのは、正式な結婚の手順をふむと両親の経済的負担が重くなってしまふことであった。正式な「手から取る」結婚は、娘を送り出す祝までには持参財も姻戚への贈り物も準備しなければならぬので、一時に多額の出費がかさむ。「取って逃げる」結婚であれば同居が先行し、姻戚へのもてなしや贈与、持参財の用意は数カ月後でよい。このため、女性たちは相手に嫁ぐこと自体に迷いがなければ、結婚を受け入れることが多い。

逆に、もし女性が全く不同意であれば、ほとんどの場合において結婚は成立しない。例えばある男性は友人たちとともに、片想いの女性を嫁入りさせようと説得を試みたが、女性が徹底的に不同意だと主張したので失敗に終わった。しかし、男性側が強引に説得して家に連れて行ってしまふこともありうるので、嫁入りの知らせが入ると両親は娘の意思を確認するため親族をさしむける。稀ではある

が、娘が結婚に同意していないと訴えたので、母親が娘を連れ帰ったという話も聞いた。意思に反して嫁入りさせられそうになったことについて、娘は裁判所に告訴すると主張した。ひとつの村のなかのことであり、実際には告訴しなかったというが、人権問題として女性側が訴えうることをこの事例は示している。無事に家に戻った彼女は、数年間にわたり学校教師を務めた後に別の男性と結婚した。

このように「(娘を)取って逃げる」結婚は、構造的に男性優位であるものの、必ずしも男性側の思いどおりにはならない。結婚に同意したはずの女性が逃げ出してしまい、若い男性がこれを恥としてふさぎこみ自殺しかねなかったこともあった。女性の側にとどのような事情があったのかはわからないが、結婚できなかった若い男性は、親族の勧めにしたがって街でしばらく暮らし、数年のうちに別の女性と出会って結婚し村に戻ったのであった。

●結婚がうみだすつながり

「(娘を)取って逃げる」と呼ばれるカザフの結婚の形態は、多く

の場合は「誘拐」でも「駆け落ち」でもなく、いまだなかなか豊かにならない村落部の現実のなかで、若い男女の恋愛結婚のひとつのあり方として、しばしば波乱を引き起こしながらも定着している。ある五〇代のカザフ女性は、「昔は親が結婚相手を決めたのは、若い人たちは相手を見る目がないからでしょう。親が相手を見極めて選ぶというのは正しいことだったよ」と語っていたことがあつた。現在では親が子どもの結婚相手を決めることはないが、それでも結婚はふたりの間だけの事柄ではない。結婚に際してもてなしや贈り物の交換によって姻戚同士が新たなつながりを築き、日常生活に不可欠な夏の放牧や冬の石炭の確保、さらには子どもの教育や就職などをめぐって協力し合うことで暮らしを成り立たせていくからだ。結婚をとおして形成されるこうしたつながりは、村落部にのみとどまるものではなく、都市部や、ときには国外に暮らす親族をも含みこんで展開していつている。

(ふじもと とうこ／国立民族学博物館民族文化研究部助教)